

地理學の傳統をついで、古文獻を參照し、内外先學の地域的研究更に氏自身の個別調査を土臺として、從來の地理、歴史書に缺くるところを補ひ、而かも大東亞新秩序の今後の展開にまで論及し、た所の極めて示唆深き書である。

總序にあつては新秩序の展開に於いて滿洲事變の意義に重きを置き、第一部 滿洲國にては綜合立地計畫と開拓とを重視して、特に長白山地區を滿洲固有國土としてその一體の開發の要を論ずる所が目立つてゐる。第二部 支那に於いては漢族の發展と諸民族との關係、西力侵略と支那の變貌を詳細に論じ、北支那開發の章下にては治安工作上、大名附近の省界の是正、淮北の新省創設を提唱して居り、南支那にては國土構造の多元性と海洋的性格をもつことより南方圈に於ける華僑問題を論じ、海南島の地政學的位置の重要性を指摘、西南支那は蔣政權、西北支那は回教徒及共產黨との關係を主にしてその動向に言及してゐる。

かくて總結たる新秩序の地政學にては、大東亞共榮圈の構造は大陸、海洋綜合型の領域構造をとるべきものであり、そのためには重要な陸上海上ルートの掌握はもとより、更に大陸と海洋との聯絡ルート確保の要を論じ、最後に日本民族は海洋的島嶼的性格をもち、島、沿海地の經營には經驗あるも、大東亞圈は海洋、大陸を包含するものなれば、皇國は大陸に確固たる基地をもつて、あり、滿洲開拓民政策は大東亞圈の綱榮の爲に最も恒久的基本的事業たり、更に八紘爲宇の理想は日本民族が常に開拓者の精神を堅持することによつてのみ達成される所であつて、滿洲開拓民

はその先驅であり、爾餘の共榮圈地域に進出すべき日本人の以て範とすべきものであらうと論じて結びとしてゐる。論旨明確、蓋し大陸建設に資する所あるべき書とする。(昭和十九年六月・白楊社・A5版・三九五頁・定價五圓)(木村憲治)

滿洲の史蹟

村田治郎著

現時の史蹟に關する研究、乃至調査報告の類が、稍々専門的に過ぎて、專攻者以外の者に近付き難い感じを與へてゐたのは事實である。従つて歴史に興味を持ち、史蹟に就いて知らんとする一般人士は勿論のこと、歴史學そのもの、研究者にとつても、史蹟に關する一般的知識を得る必要に迫られながらも、平易に述べられた概説書を缺くがために現在甚だ不十分な實狀に置かれてゐる。

滿洲の史蹟に就いても此の點は同様であつて、一小地域乃至一遺跡に關する極めて詳細な調査報告書の類の發表せられたものは少くないが、時代的、地域的に全般にわたつた概説書は、「まだ一冊もない」と斷言せねばならぬ實狀にある。本書は序文に述べられてゐる如く、著者が第一の目的として、此の全體的展望を専門外の人々に與へることにあるのであつて、併せて現在愈々興隆に赴きつゝある滿洲國の建國十周年を祝福する意に出でたものである。かくて右の意圖に副ふべく、本書には一百に上る多數の圖版と六十の挿圖を加へ、専門的な術語は出来る限り避けて平易な口語文を以て述べられてゐるが、別に各節の終りには研究文獻の紹介を以てし、また卷末には詳細な索引、史蹟地圖を加へて著者

の懇切な用意を併せ具象してゐる。

さて本書の構成は概説篇と各説篇とに分たれてゐて、概説篇に於いては現在までの研究の程度を紹介することを期し、各説篇に於いては箇々の主要な史蹟に對し、從來の研究並に著者の所見の要點を摘記して現地に臨む人々への指掌書としたものである。

先づ概説篇では、方法論の説明とも見るべき序説について、漢代、高句麗、渤海國、遼、金、元、明、清と時代を追ふて城郭、墳墓、寺廟、塔等の史蹟の各々の變遷の概要が擧げてある。元來滿洲には滿洲文化とも言ふべき固有の文化はなく、支那系、蒙古系、通古斯系などの數種の文化が、各々固有文化の尙存者の興亡と共に、次々に盛衰を繰り返したものであるので、この史蹟の時代的概説では、時代毎の文化の交替乃至混淆の形をとつて、時間的纏起が不連続となり、まとまつた印象を得ることを困難ならしめてゐること著者の序説に述べてゐる所であつて、これは滿洲なる限られた地域を取上げる以上、誠に已むを得ない。かゝる點を補ひ乍ら、更に類別的により詳しく説明したのが次の各説篇である。此の篇では、城（渤海國首都の調査、城の話、宮殿（奉天の故宮、太廟、文瀾閣と文津閣、熱河承德の行宮、帝陵（福陵、昭陵、永陵、壇廟（堂子、天壇、東獄廟、北鎮廟、孔子廟、關帝廟、娘娘廟と天后宮、佛教建築（義縣の萬佛堂石窟、義縣の泰國寺、遼系の佛塔、遼陽の白塔）、喇嘛教建築（清初の喇嘛寺、承德の寺廟、回教寺（回教寺院）、瓦（古瓦の様式）の順序で各種の史蹟を

取上げて、興味深く説明を加へてあり、時には見學の順序に従つて案内記的に説明した部分をも見受けて種々の變化に富んだ敘述法を採ることによつて讀者の興味をそがぬ苦心が拂はれてゐる。換言すれば、概説篇は史蹟の時代別縦斷の説明であり、各説篇は各種の史蹟の種類別横斷の説明とせられる。かくて兩篇は一見無關係の様に見ゆるも、實は渾然一體をなし、相扶つて初めて滿洲の史蹟に關する全體的な展望を得ることが出来るのである。

著者が建築史の専門家として、且つ二十餘年を滿洲の遺跡遺物の研究に費されたことは改めて此處に述べるまでもない。かゝる著者を得たことに依つて本書は平易のうちにしかも要を得て所期の目的にふさはしい成果を示し得たのである。その各章の記述のうち著者の過去に於ける研究の迹がよく表はれてゐる點からすると實に本書は著者二十年の研究の精華とも言ひ得るのである。その爲でもあらうか、史蹟に對する著者の切なる愛着は、史蹟を破壊する心なき輩への痛烈なる悲憤の言葉として到る處に現れてゐるのが見出される。かくて史蹟の研究は一、二の個人にしてなし得ることなく、他方史蹟の荒廢は日一日と進みつゝある實狀に於いて著者は本書を通じて、讀者の一人でも多くが、調査研究の陣列に加はり、その開明せられることを切望してゐる意味が一層強く感ぜられるのである。（昭和十九年五月・座右寶刊行會・定價十圓五十錢）（北村敬直）

雲岡石佛群

水野清一著